The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

イマージュ，知覚のラディカルな外在主義[1]

平　井　靖　史

ベルクソンがその主著のひとつ『物質と記憶』において，イマージュという一風変わった概念を提起したことは有名である．伝統的な認識論における，「表象」と「事物」の二元論的な乖離の構図を解体すべく，認識論の新たな出発点として導入されたのが，イマージュである．われわれの見・聞き・触れる対象のうちに，いったんこうした乖離が想定されると，一方でわれわれの知覚は，主観的領域のうちに囲い込まれ，他方で物質世界は，認識の到達し得ない彼岸にまで締め出されてしまう．このような領域的な囲い込み・締め出しによって，さまざまな哲学的な弊害が生じることは，しばしば指摘されるところである．

われわれがまな板の上の一丁の豆腐を眼前に見るとき，見られている豆腐は「心のうちにしかない」のではなく，まさにそのまな板の上にある．すなわち，豆腐は心の状態ではない．しかし他方，心がどうあがいてもその「写し」しか手にできないような，不可知の事物でもない．すなわち，豆腐は心の彼岸にあるのでもない．そのように考えられた豆腐こそが，イマージュである．それは，「観念論者が表象と呼ぶもの以上のものであり，実在論者が事物と呼ぶもの以上のものである」(MM1)．そしてこれは，まったく「常識の考え方」（MM2）であるとベルクソンは述べる．

1　『物質と記憶』からの引用は，Quadrige 版に基づく．MM の略記に続いて，該当頁数を添えた．翻訳は，主に岡部聰夫訳『物質と記憶』（駿河台出版社，1995）を参照したが，引用に際しては原則として自らの訳を使用した．なお，タイトルについては注 7 を参照．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

『物質と記憶』の第一章は，イマージュの導入から始まって，純粋知覚論を提示することを主題としている．そこには，上述の乖離を退けるべく，さまざまな論点が提示されている．しかしそれら論点相互の構造的な連関は，叙述の一見上の平明さに反して，意想外に不透明である．そこで本稿では，上述の認識論上の乖離をいかに退けるかという視点からテキストの論述を裁断しなおし，問題そのものの内在的秩序に従って再構成することで，イマージュ論から純粋知覚論にいたるひとつの展望を切り開くことを目的としたい．

1．三重の乖離

乖離へとわれわれを仕向ける誘因には，認識の相対性や，錯覚など，いくつもある．しかし本稿では，誘因の種類よりも，むしろ，乖離そのものの構造に着目してこれを分節化してみたい．

「表象」と「事物」を別個のものとみなすこの乖離は，構造的に見て，少なくとも三重になされうる．簡単に列挙するなら，(1) 原因と結果とは別なものである，(2) 認識は認識対象とは別なものである，(3) 本質を異にするものは別のものである，といった三種の乖離である．これらを便宜のために，順に因果的乖離，認識論的乖離，本質的乖離と呼ぶことにしよう．

たとえば，〈同じ豆腐を食べても，人によって味の印象が異なる〉といった事態にわれわれは頻繁に遭遇する．同一の対象に対して，認識が多種多様であることから，われわれは，これらの認識が各個人の心理的な領域に属するものである，と考えるように誘われる．こうしてまず，表象と事物は，認識と認識対象という資格において乖離されるだろう．

この認識論的乖離には，さらに同時に，ほかの二つの乖離が随伴しうる．すなわち，ひとたび心の領域に持ち込まれた豆腐は，物体の本質である延長を放棄し，さまざまな精神的特質を獲得することで，「豆腐それ自体」から本質的にも乖離される．ある種の空間的乖離もまた，この本質的乖離に含まれると言えよう．事物の表象は，事物から空間的に引き剥がされるにとどまらず，非延長の心理的存在として，空間そのものから締め出されるからである．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

最後に，素朴な因果的直観から，この心的状態が「豆腐それ自体」によって，あるいはこの「豆腐それ自体」を起点とする認識論的因果経路の終着点とみなされた脳（これもまた事物である）によって産出されたものだ，という考えに至るならば，今度は因果的にも乖離されることになる．生み出すものと生み出されたものは，通常同じものではありえないとみなされるからである．

念のため述べておけば，これら三種の乖離は互いに独立なものとみなしうる．認識と認識対象が別なものであるということは，必ずしも，一方が他方を産出することを含意しないし（たとえばある種の平行論），両者の本質が異なることも含意しない（たとえば反省的認識）．上に見たような，これらが互いに増強しあって三重に乖離が施されるケースは，最も極端な例であると言えるだろう．

さて，このようにして，いったん乖離が果たされ，「豆腐の認識」なるものを人数分複製して，それぞれを各個人の私秘的な領域に配給してしまうと，もう「豆腐それ自体」の側には，ほとんど抽象的な同一性を担保する役回りしか残されないことになる．〈同じ豆腐〉が人によって美味しかったり不味かったりするという事態のうちに，同一性と差異性がある仕方で共存していることは確かである．そこから，同一性を担う基体と，差異性を担う基体を数的に区別するという誘惑が生じるのもまた確かかもしれない．しかし，ベルクソンに従うなら，この誘惑は，原理的に回避不能な類のものではない．

2．イマージュと乖離

ところで，イマージュの導入は，「表象」と「事物」の乖離を退けることを眼目としているから，当然，結果的に，上記の三種の乖離をことごとく退けることになる．第一に，事物の表象は，表象されている事物に同一である．イマージュが指示するのは他ならぬこの同一者としての表象＝事物，言い換えれば，「観念論と実在論とが，物質をその存在と現象へと分離した，その分離以前の物質」（MM2）であるから，イマージュを仮定することは，ただちに，認識論的乖離を退けることである．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

第二に，事物としての脳が，表象を産出するのではない．イマージュを仮定するなら，これもただ，空間的な包括関係によって明らかなことである．部屋のうちに置かれている脳がこの部屋を産出することはできないのは自明である．「知覚が，脳から出てくるすべはない．というのも，脳は，他のイマージュ同様一つのイマージュであり，他のイマージュ群に包み囲まれているのであるから．含むものが含まれるものから出てくるというのは不条理に他なるまい」(MM39)[2]．イマージュは因果的乖離を退ける．

第三に，表象と事物が本性を異にすると考える必要もない．イマージュは二次性質を担い，かつ，延長物として空間内に実在する．「対象はそれ自体において存在し，また，他方で，対象はそれ自体においてわれわれが知覚するとおり生彩に富んでpittoresqueいる．これはイマージュであるが，それ自体において存在するイマージュなのである」(MM2)．

ただし，ここで勘違いしてはならないのは，上に挙げた三つの論点は，イマージュの導入の結果成立する描像を記述するものであって，決して乖離の不在を正当化する根拠として持ち出されているものではない，ということである．とりわけ，第二の論点，すなわち脳が表象を産出し得ないことを，含む・含まれる連関の不条理によって指摘する論点は，テキストに頻繁に登場するがゆえに，十分な注意が必要である．この記述によって，ベルクソンが，帰謬法によるイマージュの正当化を行っていると読むことはできない．そして実際には，次節で見るように，ベルクソンは脳が表象を産出するという考えが不適切であることを，これとは独立の正当化によって論じている[3]．

あるいはイマージュ論は，前哲学的な地平に出発点を置くものである以上，そもそも正当化は必要ない，と考えられるかもしれない．だが，事態はそれほど単純でもない．実際には，『物質と記憶』第一章は，仮定とし

2 「物質的世界の一部をなしているのが脳なのであって，物質的世界が脳の一部をなしているのではない」(MM13)．

3 ただし，後に検討するこの正当化は，『物質と記憶』第一章の終わりで，依然として，「直接的検証」ではないとされている（MM78)．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

てのイマージュから出発して，純粋知覚論という理論的な主張を展開する議論構成になっているからである．

純粋知覚論の主旨は，イマージュのうちに「没人格的な基底 fond impersonnel があり，そこで知覚と知覚された対象は一致しているということ，そしてこの基底は外在性そのものであること」（MM69）を示し，「人格的偶有性は，この没人格的な知覚に接木されているということ，この没人格的な知覚が事物についてのわれわれの認識の基礎 base そのものにあること」（MM30）を確立することにある．

純粋知覚論が（記憶を捨象した）知覚と対象との一致を示すことを目指す以上，乖離からの脱却は，単に仮定されるのではなく，理論的に正当化されなければならない．この議論は同時に，知覚とは本性を異にするものとしての記憶を認める主張を準備し，純粋記憶論へと接続していくという意味で，『物質と記憶』という書物の全体にとっても本質的な契機をなしている[4]．

『物質と記憶』第一章の独特の難解さは，こうした大きな議論枠組みの中に位置づけられるべき個別の論点が，必ずしもしかるべき論理的な秩序に従って配列されていないように見える点から来る．詳細なテキスト注釈によって，この無秩序が見かけ上のものであることは示されうるだろうが，さしあたり本稿にとっての課題は，テキストの順序にとらわれず，問題の要求する構造的秩序に沿って，論述を再構成することである．われわれの分節化が正しければ，ベルクソンがイマージュ仮説から出発することによって意図していたことは，正確には，乖離を前提としない地点に身を置くことであり，乖離を論駁する地点に身を置くことではない．だからこそイマージュを前提にしたうえで，なお，諸々の乖離について実質的な批判が可能であり，必要であり，そして現になされているのである．これら

4　なお，本稿では記憶論には立ち入る余裕がないため，簡単に触れておくことしかできないが，乖離からの脱却というこのモチーフは，知覚のみにかかわるわけではない．イマージュは，知覚と記憶の混合物である．正確に言えば，イマージュのうちに，知覚の取り分と記憶の取り分を見定めて，その上で，イマージュが，知覚の取り分においては，物質と合致し（純粋知覚論），記憶の取り分においては，過去と合致する（純粋記憶論）ことを示す．過去それ自体と記憶との乖離を退けることは，記憶論に，きわめて興味深い問題系を切り開くものである．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

の論点の検討が，次節以降の課題となる[5].

3．因果的乖離と本質的乖離の否定

まずは，因果的乖離の否定から見ておく．脳による表象の産出を否定する議論は，生理・生物学的考察に基づくものであり，明快である．

「脳の構造と脊髄の構造を比較してみるだけで，脳の機能と脊髄神経系の反射活動との間には複雑さの差異があるのみで，本性上の差異はないことを納得するのに十分だろう．実際，反射活動においては，何が生じるか？刺激によって伝達される求心運動は，脊髄の神経細胞を介して，即座に筋肉収縮を引き起こす遠心運動へと反射される．他方，脳神経系の機能はどうか？末梢からの刺激は，脊髄の運動細胞に直接伝播されて筋肉に必然的な収縮を強いる代わりに，まず脳へと上昇し，ついで，反射運動の際に介入したのと同じ脊髄の運動細胞に降りてくる．……刺激が，この過程から，事物の表象に転化する神秘的な力を汲み取るなどということは，私には理解不能であるし，今後も理解できそうにない」(MM25)．「脳は，それが受け取るものに，何も付け加えない」(MM26)．「要するに，神経系には，表象を製作するのに，あるいは準備するのにさえ，役立つようないかなる装置もない」(MM27)．

興味深いのは，認識経路の生理的因果的説明をするに際して，ベルクソンが初めから，入力系統（求心・感覚神経系）にあわせて，出力系統（遠心・運動神経系）まで含めて考察している点である．一般に，伝統的認識論に

5　ところで，認識論的乖離を退け，ひとまず一元論的な地ならしをする道具立てとしてみれば，イマージュは，大森荘蔵が「立ち現れ」と呼ぶものにいくらか似ている（「心身問題，その一答案」，『流れとよどみ――哲学断章――』所収，産業図書，1981）．しかし，イマージュの導入は，ベルクソンにとって出発点であって，到達点ではない．ベルクソンはイマージュの導入によって，いったん伝統的な二元論的乖離の構図をご破算にしたうえで，新たな二元論の線引きを企画しているのである．知覚と記憶の二元論である．この点については本稿の範囲を超えるが，しかし本稿の扱う範囲でも，両者の相違は見逃すことができないものである．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

おいては，脳が因果経路の末尾に位置すると想定される場合が多い．しかし，ベルクソンの見地からすれば，これは，さまざまな予断に基づく，目的論的な視野狭窄の典型である．

実際には，下等生物から，人間にいたるまで，特定の刺激入力と，特定の身体運動の出力との間には，自動的必然的な連結が見られる．ベルクソンの言う「感覚－運動機構 méchanisme sensori-moteur」とは，習慣によって形成された，感覚性入力と運動性出力との自動的連合回路のことである．注目しておきたいのは，この感覚－運動機構によって，外界から得られた刺激が，中枢を経由して，運動へと伝えられる際に，この伝達を表現する語として，ベルクソンは「引き継ぎ・引き伸ばし prolonger / continuer」という語彙を頻繁に用いる点である．これは，神経中枢（脳や脊髄）を，（通常そう考えられるように）一種の「折り返し点」としてではなく，むしろそこを順当な作用伝播が滞りなく通過していく，単なる「通路 chemin」（MM33），「伝導体 conducteur」（MM82），「通過地点」（MM77, 169）として考える可能性を示唆している．これが，実はベルクソンによる知覚発生の説明に大きく寄与しているのだが，この点については，以下第5節で〈反射〉としての知覚を検討する際に再び採り上げることにしたい．ここで確認すべきことは，脳に他の物質にはない特異性が備わるとしても，それは作用連鎖の「末端」や「折り返し点」に位置するということではない，という点である．

次に，本質的乖離を否定する議論に移る．表象を心理的，したがって非外延的なものとみなす場合には，不可避的に空間的乖離を伴うから，逆に本質的乖離を認めるこの立場から知覚を説明するためには，この非外延的な表象を，空間座標上の本来の場所に局所化し直さなければならない．これは「投射」の理論と呼ばれている．ベルクソンは，投射による局所化の不可能性を指摘することによって，本質的乖離を退けている．

「非外延的な感覚が，いかにして延長した面を形成し，ついでいかにして身体の外部へと投射されるというのか」（MM46）．「単純で，非外延的な内的諸状態のうちには，空間内で特定の秩序を，他の秩序にもまし

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

て選び取る理由が決して見出されないだろう」(MM62).「これらの〔非外延的な〕感覚が，いかにして外延を獲得するのか．またとりわけ，ひとたび権利上外延が獲得されたとしても，いかにしてこれらの感覚うちの特定のものが，空間内の特定の点を選ぶのか」(MM49) [6].

こうして，ベルクソンは，感覚を純粋に非外延的なもの・主観的なものと考える発想を退ける [7]．だが，すぐに分かるように，この議論は，依然として消極的な正当化にとどまる．感覚は質的なものであるが，空間の側に存在する，ということを積極的なかたちで主張するには，他方で，科学が記述するような，「振動 vibration, ébranlement」「作用 action」としての等質的物質と，知覚が示すような質的相貌が，いかにして折り合いをつけられるのかを解明しなければならない．その答えの主要な部分は，〈記憶力による収縮〉という論点に基づくものであるため，本稿の守備範囲を超えるが，知覚論の内実を明らかにすることで，知覚論の範囲内でこの問題に見通しを与えることはできる．本稿ではこれを第 6 節で扱うことにした．

さしあたり，ここまでの検討を通じて示されたことは，以下の事柄である．表象が事物によって産出されること（因果的乖離）を否定し，また，何によってであれ心のうちに発生すること（本質的乖離）を否定することで，どちらにせよ表象を，事物とは数的に異なる，別個のものとして考え

6　同じ難点は，共通感覚の発生にまで及ぶ．「この〔非外延的といわれる〕感覚が，いかにして外延を受け入れるのか．……この難点を通過して，仮に視覚的延長が構成されたとしよう．今度は，この視覚的延長が，いかにして触覚的延長と合流するのか」(MM63-64)．なお，ベルクソンは，非延長と延長との間に「一連の中間状態」(MM53) を認めており，その例として「感情的状態 état affectif」(MM53) を挙げている．

7　なお，感覚を外延的なものとみなす論点と相補的な論点として，物質的事物に質を認める議論があるが，紙幅の都合で，本稿ではこれには触れない．ところで Mullarkey は，感覚に延長を認めるこうしたベルクソンの立場を，「ラディカルな外在主義」と呼んでいる（J. Mullarkey, *Bergson and Philosophy*, Notre Dame, 1999, p. 33.）．また，Lawlor は，イマージュをその三つの特徴づけにおいて分析しているが，そのはじめの二つ，「外延性」と「現前性」において，それぞれ主観性からの差異化，客観性からの差異化を指摘するかたちで，この論点に触れつつ，「イマージュ」という語の選択理由について，（彼がイマージュの第三の特徴づけとみなす）「芸術」の観点から，Filonenko とはまた違った考察を示している．（L. Lawlor, *The Challenge of Bergsonism*, Continuum, 2003, pp. 4ff. ; A. Filonenko, *Bergson*, Les Édition du Cerf, 1994, p. 218.）．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

ることが退けられることになる．このことによって，事物から（増加の途ではなく）「減少の途」によって知覚を見出すというベルクソン的知覚論への道筋が準備されたことになる．

「仮に，知覚のうちに，物質以上のものがあれば，……物質から知覚への移行は，解きがたい神秘に包まれたままになるだろう．しかし，物質から知覚へ，減少の途によって移行することができるのあれば，……事態は同様ではない」（傍点引用者，MM32）

4．作用の〈縮減〉――知覚の質料的条件

では，いよいよベルクソン知覚論の本題に入ることにしよう．ベルクソン自身は，知覚の成立について，どのような積極的な説明を与えているのか．最初の問題は，知覚の質料的な条件とは何か，である．ここではまず先に，テキストを引いておきたい．

「純粋知覚と物質の関係は，部分と全体の関係に他ならない」（MM74-75）．

「私の知覚は，諸イマージュの総体のうちに，影なり反射なりのかたちで，私の身体の潜在的ないし可能的な行動〔作用〕を描出している」（MM16）．

ここでは問題を二つに絞りたい．まず，知覚が物質の「部分」であるとは，これが単なる比喩でないとすれば，正確には，どのように解すればよいのか．次に，物質レベルの作用－反作用と，認知レベルでの刺激－反応との結びつきを，どのように理解すべきなのか．

これらの点を解明するには，具体的なモデルの検討によって，純粋知覚論を肉付けしていく作業が不可欠である．そこで，ここでは，まず，知覚発生過程に関する，ひとつの一般的（と思われる）説明モデルを採り上げたい．

（モデル）対象が視覚的に知覚されるとき，光源から発する光が対象に反

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

射して，われわれの眼に至り，その視覚刺激は視神経を通じて脳にいたる．

次に，このモデルに順次修正拡張を施すかたちで，純粋知覚論における知覚発生の質料的条件を提示していく．

（1）第一に，眼という感覚器官には，可視波長の電磁波のみが到達するわけではないということを忘れてはならない．可視波長の電磁波がわれわれの眼球に達する多くの場合には，紫外線など他の電磁波もまた達しているから，実際にはより多くの物理的「入力」があるはずである．そしてこの入力も作用であるかぎり，物理的な反作用を引き起こす．その顕著な一例として，紫外線の長期にわたる被曝はわれわれの水晶体の細胞に変容をきたすことが挙げられよう．こうしたことは，われわれの感覚器官もまた物質であり，物質であるかぎりの感覚器官に受け取られた作用は，自動的に，物質としての反作用へと引き継がれるという単純な事実を思い起こさせてくれる．

（2）さらに，電磁波は，所定の感覚器官のみに到達するわけでもない．これも，上と同様に単純な事実であるが，知覚がその質料において対象に部分的に合致することを理解するうえでは，等しく重要な論点である．たとえば，先ほどの紫外線が，身体の大部分を覆う皮膚に対して変化をもたらすことは，われわれが日常経験することであるが，この同じ皮膚には，当然可視波長の電磁波も届いており，したがって，これに対する反作用もまたある．ただし，皮膚は，この電磁波に対して，それが可視波長である限りにおいてとるべき固有の反作用を持たないのである．

（3）多くの場合電磁波は，当該の対象の方向からのみ到達するわけではない．このことは，われわれの身体が，四方八方物質に取り囲まれており，絶えずこれらとの間で作用を受けては返しつつ存在している，ということ，また，対象となっている事物もまた，それ自体同様の作用に取り囲まれその通過点として存在している，ということ，そして問題とされている知覚刺激は，この膨大な作用連関の中の，ごくわずかなものによって担われているに過ぎないこと，を理解させる．はじめのモデルは，問題の視覚刺激が，われわれを取り巻く電磁波のうち，当該の対象方面か

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

ら届くもの，さらにそのうち，他の身体部位ではなく眼球に到達したもの，さらにそのうち，波長が0.3μmから0.8μm程度のものに過ぎないことを，十分な仕方では示さない点で，ある種の目的論的視野狭窄に陥った描像であると言える．有意な視覚情報として大脳に到達するのは，そこに現前する作用の全体から見れば，きわめてわずかな部分に過ぎない．

（4）脳が終点ではない，という点．大脳にまで至りつくことのできた選ばれた作用が，知覚だというのではない（後者が前者の「関数」（MM17）であるにしても）[8]．「つまるところ，私が表象しているのは，脳内の分子運動以外のなにものでもない……この命題に，わずかでも意味があるだろうか」（MM17）．ここでも同じように，物質としての脳が，一定の分子運動を引き起こすのみである．そして，ニューロンの樹状突起同士の可能な組み合わせの中からひとつの経路が選択されると，刺激は，今度は運動神経を経由して，たとえば筋肉収縮という作用へと引き継がれていく．したがって，われわれが知覚して行動するという回路も，微視的に見れば，文字通り物質的な作用・反作用回路に他ならず，このかぎりでは，脳もまた，通路に過ぎないのである．

この経路の中には，徹頭徹尾，作用の伝播以上のものはない．言い換えれば，認識経路に介在するすべてのイマージュは，作用の伝播によって緊密に結び合わされている．否，むしろ，すべてのイマージュが，「広大無辺な宇宙のうちに伝播する変容をあらゆる方向に通過させる，ひとつの通路に過ぎない」（MM33）．ベルクソンの純粋知覚論の大きな特色は，知覚を，「純粋認識」（MM24）「一種の観想」（MM71）と考えるのをやめて，この徹底的，かつ包括的に考えられた作用連関の中でその成立を描こうとする点にある．

しかし，上に描いたかぎりの条件では，依然として，表象像としての知覚は現れない．われわれが知覚するとき，作用としては，そこで何が生じているかを述べたにとどまる．しかし，すでに触れたように，知覚表象を

8　Mullarkeyは，この点のベルクソンの立場を，C. V. Borstに代表される現代の「同一論」との対比で考察していて興味深い（J. Mullarkey, *Bergson and Philosophy*, Notre Dame, 1999, p. 40.）．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

脳が新たに産出することは否定されているのであるから，知覚の質料的条件はこれで出揃っている．

5．〈反射〉—— 生彩ある知覚の発生

次に検討すべきは，〈反射〉という概念である．これが知覚発生のいわば形相的条件をなす．

「生物は，外的な作用のうち，無関心なものはいわば通過させる．そのとき他の作用は，孤立化されて，「知覚」になるだろう．それはあたかも，事物の表面から発する光，絶えず伝播されているが，決して顕現することのなかった光を，われわれが事物の表面へと反射させているかのようであろう」(MM33)「したがって事物についてのわれわれの表象は，要するに，事物がわれわれの自由にぶつかりにきて，反射するところから生まれるといえよう」(MM34)．

ベルクソンはこのように，知覚を〈反射〉として規定している．しかし，他方で，ベルクソンは知覚の〈投射〉モデルを一貫して批判していた．したがって〈反射〉を理解するうえでは，これが〈投射〉とは，正確に言って，いかなる点で異なるのかを踏まえることが重要である．また，同じく知覚を論じる語彙として用いられる，作用に対する〈反作用〔反応〕〉という概念も，合わせて対比させておくべきだろう．

脳は，それが作用の通過点に過ぎない限りにおいては，他の物質と変わらない一つの物質である．そしてその役割は，すでに触れたように，与えられた作用を単に「引き継ぐ」点に存している．そしてそのかぎり，表象像が発生しないことは明らかである．

ところで，所与の刺激に対して，身体がとりうる行動パタンのストック（組織された運動メカニズム）が複数ある場合，脳は明らかに，これら複数の経路間の選択の器官として機能している．これが，そしてこれのみが，脳が他の物質に対して持ちうる「特権」である．その場合，もはや作用は，自動的・必然的な仕方では継承されない．すると，刺激が脳に至り

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

つきながらも，そこで「阻害され」(MM29)，「生まれつつある複数の作用へと発散して」(MM29)，即座に目に見える運動へと引き継がれないことがありうるということになる．ここには，単なる物質としての必然的な応答が見られないという意味での「自由」，あるいは「非決定性」が介在する．知覚が発生するのは，まさにこのとき，事物からの作用伝播が，この自由に「ぶつかる」ときなのである[9]．

条件を整理してみよう．

刺激が脳を経由したからといって，単に反作用へと引き継がれるだけならば，やはりそこに表象の生まれる余地はない．知覚が生じるのは，届けられた作用が，脳から運動へと継承されず，脳内でいわば発散するときである．しかし，脳が知覚を産出することは，脳の生理学的な機能からして否定された．また，心の側で成立した非外延的な表象が投射されるということも，それがどのようにして空間内の指定の位置に局所化されるのか説明不能であるがゆえに，否定された．とすれば結局，知覚は対象の側で生じると考えなくてはならない．しかし，脳にまで至った作用の伝播が，ここで折り返して，対象の側に戻るわけでもない．そのような経路は存在しないからである．ベルクソンがこの〈反射〉を「見かけ上」(MM47) のものであると述べるのもそれゆえである．とすると，事物から脳へと届いた刺激が，引き続く反作用へと連絡されないとき，その中断という事態に対応づけられる当の事物そのものが，まさに知覚であるということになる．まさにこの事態を指して，ベルクソンは「反射」という表現を用いていると理解すべきであろう．

9　知覚は，反作用が実現される場合には，生彩あるものとしては発生しない．逆に，反作用が可能であるにもかかわらず，実現されず，単に可能にとどまる場合には，知覚は生彩あるものとして発生する．と，こうして考えると，では，反作用が不可能である場合にはどうなるのか，という疑問がわいてくる．しかし，いかなる反作用も不可能である場合というのは，実は存在しない．たとえば，われわれは，超音波に対する聴覚的な反応のストックを持ち合わせていないが，だからといって，超音波に対して反作用が不可能であるわけではない．われわれは，聴覚器官である前に物質であるからである．作用を伝導する基盤としての物質世界に，われわれの身体もまた物質として帰属していることが，知覚の質料的条件となっていることを，ここでも忘れてはならない．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

したがって，この〈反射〉は，因果的な意味にとられてはならないし，心理的構成物の空間への「投射」ともはっきり区別されなければならない．知覚の質料的条件が徹頭徹尾因果的な仕方で提示されるのに対して，生彩あるものとしての知覚の発生が，非因果的であると同時に，脱心理的な仕方で説明されている点に，純粋知覚論の最大の特徴がある．

「じっさいには，意識の中で形成されてのちにPへと投射されるような，非外延的イマージュなどは存在しない．本当は，点Pも，それが発する光線も，網膜も，かかわりのある神経要素も，緊密に結び合った全体をなすのであり，発光点Pはこの全体の一部をなしていて，Pのイマージュが形成され知覚されるのは，他の場所ではなく，まさにPにおいてなのだ」(MM41)．

6．〈関連付け〉——中心化された物質としての知覚

〈縮減〉は，純粋知覚が物質の部分に，質料的に同一であることを示す．純粋知覚とは，空間内に実在する電磁波や音波を，ただしそのごく一部を素材とし，そしてそれのみを素材とする．

〈反射〉は，知覚がその素材が存在するのと同じ場所に局所化されることを示す．知覚は，物質を素材としながら，他所ではなく，物質の置かれるその場所に生起する．とすれば，知覚と物質とは，まさに異なる相貌のもとに現れた紛れもない同一物である，ということになろう．

最後の論点がここに現れる．同一イマージュへの，知覚と物質の二重帰属である．ここでようやく，認識の相対性に基づく認識論的乖離が，議論の俎上に上る[10]．知覚と物質が同一物に二重帰属するならば，無数の知覚がこの同一物に多重帰属できなければならない．科学が提示する物質は唯

10 これに対し，錯覚に基づく認識論的乖離については，一般的には，「錯覚論法」と名づけられ，表象と事物の乖離を引き起こす主要な論点とみなされるにもかかわらず，ベルクソン知覚論におけるその扱いは，きわめてシンプルである．それは，錯覚が記憶に基づくものであるからである．「あらゆる錯覚は，知覚に混入する記憶に由来する」(MM30; cf. MM41)．

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

一であるのに，その同じ事物についてのわれわれの認識が多様であることは，揺るがしがたい事実だからである．したがって，知覚と物質との関係を問うことは，同一物に多重に帰属しうるものと，同一物に一重にしか帰属しえないものとが，ともに同一物に帰属するという関係を問うことなのである．

ともすれば，同じ場所に，いわば「重ね描き」される，とでも言って済ませるほかないように思われる．この知覚と物質の関係について，ベルクソンは，はっきりと構造的な水準で識別規定を与えている．この規定を確認して，稿を閉じることにしたい．

第一に，〈関連付け〉という概念である．この概念は，随伴する〈中心〉および〈システム〉の概念同様，テキストの比較的冒頭に出現するにもかかわらず，〈縮減〉と〈反射〉の理論の展望の下で，はじめて正当な意味で理解されうるように思われる．知覚とは，ある事物が，ある他の事物に関連付けられる限りにおける，その事物のことを意味するわけである．

「私が「物質」と呼ぶのは，諸々のイマージュの総体のことであり，「物質の知覚」と呼ぶのは，ある特定のイマージュ，すなわち私の身体の可能的作用に関連付けられた rapportées，これら同じイマージュのことである」（傍点引用者，MM17）．

一方では，イマージュの総体が，「それ自身に関連付けられて」（傍点引用者，MM20）考察される．これが科学が扱う「物質」の世界であり，そこには特権的な「中心がない」（MM22）．したがって，そこには原理的に，一通りの脱中心化のされ方しかない．

他方では，この同じイマージュ群が，その中のある特定のイマージュに関連付けられる．これは，中心なき物質の総体のうちに，基準点としての中心を設置することを意味する．したがって，そこには原理的に，多様な中心化のされ方が存在する．

ベルクソンは，このように区別された全体の各々を，〈システム〉の名で呼んでいる．つまり，同じ諸項から構成される全体について，諸項間の〈関連付け〉の見立て方に応じて，諸システムが区別されるという点が，とり

NII-Electronic Library Service

The Society of Philosophy of Tokyo Metropolitan University

わけ重要である.

「同じイマージュ群が，同時に，二つの異なるシステムに帰属しうる……一方のシステムは科学に属し，そこでは各々のイマージュは，それ自身にのみ関連付けられる……．他方のシステムは意識の世界であり，そこではすべてのイマージュが，ある中心的なイマージュ……によって規則づけられ，その変動に付き従っている」(MM21).

最後に，〈知覚とは，中心化された関連付けの相のもとにみられた物質である〉というこの規定も，先に見た〈縮減〉と〈反射〉の条件の下で機能することを忘れてはならない.任意のイマージュを中心とみなすだけで，生彩あるものとしての知覚が成立するとは限らないからである．中心とみなされたこのイマージュが単なる物質である場合には，あるいは，身体であってもそれが単なる物質として見られる限りにおいては，そこには作用の自動的な連絡継承しかない以上，この中心化は，はじめのシステムに対して，質料的にも形相的にも，何の変化ももたらさない．そこにあるのはいわば，「潜在的・中和された表象」(MM33) に過ぎない.

しかし，原点として取られたこのイマージュがわれわれの身体である場合には，かつ，この身体が単なる物質としてではなく，感覚－運動装置として見られる限りにおいては，事情が異なる．そこには感覚－運動装置としての身体が反応しうるかぎりでの作用のみを残して，作用全般の大幅な〈縮減〉が見られ，さらに，脳という，きわめて高度に複雑化した伝達経路の介在によって，一定の刺激が必ずしも即座に反作用へと引き継がれず中絶する可能性が出てくる（われわれの自由による〈反射〉）がゆえに，物質の場合と違って今度は，この中心化によって，システム全体の相貌が一転することになる[11]．生彩ある知覚は，こうして，物質のシステムに，共帰属するのである.

11 もちろん，〈中心〉，〈縮減〉，〈反射〉といった語群は，あくまでシステム相関的な意味に解されなければならない．実際に，特定の身体が〈中心〉となることで「物質というシステム」の全体を劇的に変化させるわけでも，〈縮減〉することで「物質というシステム」の運動の総量が減少するわけでもない.

NII-Electronic Library Service